
迷子

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子

【Nコード】

N8762H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

男の子がお母さんと一緒にやって来たスーパーで急におトイレに行きたくなってそこから迷子になってしまっ。小さい時にありがちなことを書いた作品です。

第一章

迷子

真史はお母さんと一緒に買い物に出掛けていました。それはいつものことでした。

けれどこの時は違って。お買い物にあるものを連れてきていました。それは。

「ねえ真史」

お母さんは自分の子供に顔を向けて声をかけました。この時真史はお母さんのすぐ後ろでにこにこしていました。

「本当にいいの？ジロ連れて来て」

「いいじゃない。だって僕ジロと一緒にいたいもん」

自分が手綱を持っているその白く小さな子犬を見て笑顔でお母さんに言うのでした。

「だから。いいでしょ？」

「確かにジロの散歩になるけれど」

お母さんは息子の言葉を聞きながらとりあえずといった感じで言いました。

「けれどね。気をつけなさいよ」

「車を？」

「そう、車よ」

やっぱりお母さんが言うのはこのことでした。

「車には本当に気をつけなさいよ」

「僕もジロも気をつけてるもん」

「ワン」

ここで真史だけでなくジロもお母さんに応えてきました。明るい鳴き声でした。

「だから大丈夫だよ。お母さん気にし過ぎだよ」

「気にし過ぎだっていうのね」

「そうだよ。大丈夫だって」

また言う真史でした。

「だからジロ、行こう」

「ワン」

今度は真史の顔を見上げて鳴いて応えたジロでした。そうして彼等は笑顔で頷き合うのでした。お母さんはそんな息子と愛犬を見て仕方ないわね、といった顔になって言うのでした。

「わかったわ。それじゃあね」

「うん。それじゃあ？」

「ちゃんとしておくのよ」

こう一人と一匹に言いました。

「ちゃんとね。お母さんがスーパーで買い物をしている間は」

「その間は？」

「ジロと遊んでなさい。それで変なところに行ったりしたら駄目だよ」

「うん、わかってるよ」

ここでも笑顔で頷く真史でした。

「それはね。じゃあお母さんが買い物してる間駐車場のベンチのところにいるからね」

「すぐ終わるからね。お菓子も買ってあげるから」

「お菓子も!？」

「アイスクリームがいい?それともチョコレートかしら」

「両方」

自分の顔を見て首を少し右にやって尋ねてきたお母さんに対して言うのでした。

「両方食べたいけれど駄目かな」

「いいわ。それじゃあチョコレートがたっぷり付いたアイスをね」それを買うと言ったお母さんでした。それでいいわよね」

「うん御願い。じゃあ僕ずっと待ってるから」

「ジロには。ビーフジャーキーね」

ジロにはそれだというのでした。

「それ買ってあげるわ」

「ワン」

また明るい鳴き声で応えるジロでした。真史もジロも笑顔でお母さんを待つことにしたのでした。こうして彼等はお母さんを待ってスーパーの駐車場のベンチのところで楽しく遊ぶのでした。

けれどお母さんが行ってしまっただけで暫くしてから。真史は急にモジモジとしましたのでした。

「ワン？」

「ちよっと御免」

真史は自分を氣遣うようにして声をかけてきたジロに対して言うのでした。

「おトイレ行って来るから」

「ワン？」

「だからちよっと待っててね」

こう言ってジロをそこに置いておトイレを探しに行くのでした。

駐車場はとても広くてまずそこで迷いました。何処に行っても車ばかりでおトイレが何処にあるのかさえ全くわからない有様でした。

「困ったなあ」

真史はその車の中を潜るようにして進みながら困り果てていました。

「おトイレ。何処なんだろう」

けれど見渡す限り車ばかりでおトイレは全く見つかりません。そうして暫くおトイレを我慢しながら進んでいくと。ふとある人達の話聞いたのでした。

「おトイレこっちよね」

「うん、こっちだよ」

この話を聞くのでした。話を聞くともう。

第二章

「そうか。こっちなんだ」

真史にもわかったのでした。それで何処に行くべきかもどうするべきかも。彼はその人達について行ってそれで何とかトイレに辿り着くことができました。これで何とか助かりました。

けれどおトイレを済ませてそこから出てからふと気付いたのです。道が全然わからないのです。

「ベンチ……何処？」

周りを見回しても何も見えません。何処に何かあるのかさっぱりわかりません。見渡す限り車ばかりで横にはスーパールの建物があって人が一杯行き来しているのが見えるだけです。他には何も見えないのでした。

そんな中で真史は途方に暮れてしまいました。どうやってベンチまで行くのか。全くわかりませんでした。

けれどそれでもベンチまで行かないといけません。お母さんの約束だからです。それにそこには大好きなジロがいます。行きたくて仕方がないといった理由もありました。

だから真史はとりあえず歩きはじめました。そうしてベンチを目指します。けれど行けども行けども車ばかりでやっぱりベンチは見えません。何処に何かあるのかさえわからなくなってきました。

「車ばかりじゃない」

本当に見えるのはそれだけです。何処を進んでも何処を曲がってもです。他には何も見えません。

「ジロ、何処なの？」

その車の中を進みながら周りを見回して言います。

「何処にいるの？」

時々今動きだした車に驚かされながら不安になりながら探します。けれどベンチには辿り着けず。真史は完全に迷子になってしまった

のです。

その時ジロは真史を待ちながらベンチの側で丸くなって寝ていました。けれど不意に何かに気付いたように顔をあげて。それで少し真剣な顔になるのです。

「クウ……」

そうして立ち上がると手綱を引き摺ってそのうえで何処かに行きました。そのまま車の中に入って行くのです。

真史は今にも泣きそうな顔になって車の間を進んでいきます。けれどどうしてもベンチは見えず彼はもう歩きながら途方に暮れていました。本当に何処に何があるのかさえわかりません。

その中で誰かに聞こうとも思いましたが。ここでお父さんとお母さんにいつも言われている言葉を思い出してそれを止めてしまったのです。

「駄目だよ、それ」

首を横に振って自分でそれは駄目だと言うのです。

「知らない人について行ったら」

そのことを思い出してそれは止めるのです。そうして周囲を見回しながら必死にベンチを探し回っていると。不意に何処からか声が聞こえてきました。

「ワンワン」

「ワンワン？」

その鳴き声は聞き覚えのあるものでした。

「この声って。まさか」

「ワン！」

ここでまた聞こえてきました。

「ワン！」

「ジロ!？」

真史にはわかりました。その声が誰のものなのか。そして何処から聞こえてくるのか。

「こっちだ。ジロ！」

「ワン！」

また声が聞こえてきました。そうして声のした方に行くと。そこにジロがいました。真史のところに駆け寄ってきます。そうしてそのジロを抱き締めると。

「うわあ、くすぐったいよ」

「クウ~~~~ン、クウ~~~~ン」

優しい声を出して真史の顔を舐め回すのでした。再会を喜んで。

「ジロ、何で僕のいる場所がわかったの？」

「ワン」

けれどジロは答えず鳴いて応えるだけでした。けれど真史はそれを聞いただけで何となくわかったのでした。本当に何となくですけれど。

「そうなんだ。僕の声とかを聞いて」

「ワウン」

「あと匂いかな」

犬の鼻が物凄くいいことはお母さんから教えてもらっていました。それもとんでもない位に。それだったら自分がいる場所もわかるのだと考えたのです。

「それで来てくれたんだね。有り難う」

「ワン」

ここでも嬉しそうに鳴くだけのジロでした。けれどもうそれだけで充分でした。

後はジロがベンチまで案内してくれました。そうしてそこでまた遊んでいるうちにお母さんが来て。笑顔で言うのでした。

「いい子にして待っていたのね。そんなに仲良く遊んで」

けれどお母さんは知りませんでした。真史とジロに何があったのか。真史がどれだけ寂しく怖く辛い思いをしてそしてジロに助けてもらったことは。それは知りませんでした。

お母さんが知らなくても真史はこのことをずっと忘れませんでした。ジロだけでなく他の犬も皆大好きになって。犬のことを大好

きでい続けました。何時までも何時までも。

迷子 完

2009・4・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8762h/>

迷子

2010年10月8日15時18分発行